

漢詩（唐詩）教材の授業について

阿部正和

一 漢詩（唐詩）の授業について

教科書に採録されている漢詩（唐詩）は、教科書が改訂されてもほとんど変わることなく固定化されており、その構成は、詩の形式や自然、愛情、友情といったテーマ別になっていることが多い。そのため教材選択が、マンネリ化しやすく、私のこれまでの経験では、教材研究の時間の節約のため、採用している教科書が変わらない限り、毎年同じ漢詩（唐詩）を取り扱うことをよしとする学校や、絶句、律詩といった各形式やテーマから有名なものを一まずつ選んで授業を行う学校もあった。また授業の展開は、教員が作者や詩の背景を説明し、その形式と押韻をおさえ、書き下し文、口語訳を確認し、ポイントを解説する、といったパターン化された授業になりがちである。

しかしそれでは、もったいない気がする。そこで今回の提案では、「二つだけの教材を精読するだけでなく、複数の教材の組み合わせのなかで新しい授業づくりをするには、どのような単元づくりが適切

か^①と、田中宏幸先生がおっしゃっていることをふまえ、複数の漢詩（唐詩）教材を用いた授業づくりについて述べたいと思う。

二 複数の漢詩（唐詩）教材を用いた授業の提案

学会当日に、三つの授業の提案を行った。

A 【人と自然の関係を考えさせる授業】

B 【「春雨」について考えさせる授業】

C 【声の記憶を考えさせる授業】

このうちA、Bについては、拙稿「漢詩教材を用いた実践」（浜本純逸監修・富安慎吾編 ことばの授業づくりハンドブック『漢文の学習指導』溪水社・16年12月）に詳しく述べているので、そちらをご参照いただければ幸いである。ここでは概略のみ述べる。

A 【人と自然の関係を考えさせる授業】は、杜甫の「春望」と「春夜喜雨」を用いる授業で、学習者にこの二首を読み比べさせることによつて、人は自然をどのように考え、どのように表現してきたのか、ということや、人と自然との距離感といった問題を考えさせ

ることを目的とする。そしてさらにこれらのテキストが提示する問題に対して、学習者が自分の知識や体験をふまえながら、自らの認識を拡充・深化させることができれば、これは東日本大震災や原発事故、最近の豪雨災害を経験した私たちにとつての「自然との共生」を考えるための契機となると考えている。

B 【春雨】について考えさせる授業は、Aで取り上げた「春夜喜雨」とのつながりとして「春雨」に着目し、日本文学と読み比べる、というもので、「春夜喜雨」を用いて、別のパターンの授業展開を考えたものである。例えば正岡子規の「くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる」という短歌と読み比べることによつて、それぞれのテキストの主体が「春雨」をどのようなものとして捉えているのか、「春雨」に濡れた花（薔薇）に何を感じているのか、また現代の私たちはどうか、といった問題を学習者に考えさせることを目的とする。

そしてこの学習は、Aの【人と自然の関係を考えさせる授業】にとどまらず、漢詩を「人間の言葉として、おなじアジアに生きるものの言葉として、またふるくから日本語の中に根をおろして生きてきた言葉として、私たちの心のなかに息づいて」いるものとし、「それを大切にし、『万葉集』や現代詩などを読むように」読みたい、とする安藤信広氏の考えにもつながっていると考えている。

C 【声の記憶を考えさせる授業】は、杜甫「月夜」と李白「静夜思」を用いる授業である。個人的なことではあるが、稿者は中国古典詩のそれぞれのテキストが、音をどのように「き（聞・聴）」こうとしているのか、ということに興味があり、以前その研究の一環と

して、「国語総合」採録の唐詩における自然の情景描写について、音に着目して考察したことがある^③。その結果、教科書においては視覚に関連する問いが多く設けられるのに対して、聴覚に関連する問いがほとんど見られない、ということが明らかになった。しかし聴覚に着目することで、テキストの主体の「心」により迫れるのではないかと、稿者は考えており、以下で述べる提案はそれに基づいたものである。

本年度現任校では、第一学習社の改訂版「新訂国語総合」古典編を使用しており、ここでは「愛情」というテーマに分類された形で、李白「静夜思」、杜甫「月夜」、白居易「八月十五日夜、禁中独直、对月憶元九」が採録されている。そして同指導書では、「詩人がどのような境遇にいるか。どこにいて、何を見ているか。そのときの家族や友人に対する愛情を理解させる。」という指導目標が設定されている。またこれらの詩は、川合康三氏が「中国に古くから定着している、月を見ることによつて別の場所を思うという発想に基づいています。月は自分を照らしているだけでなく、同じ時に別の場所も照らしています。月の光は偏在しています。そこで月を媒介としてその月が照らしているであろうほかの場所を思う、ほかの場所の人の思う、そういう発想です。」と述べるように、テキストの主体が「月」を「見ている」ことがポイントとなる詩である。が、ここにあえて学習者に「声の記憶を考えさせる」視点を入れることによつて、テキストの主体の「心」により迫らせようとする試みである。

杜甫「月夜」〔唐詩三百首〕

今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

閨中只独看 閨中 只だ独り看るらん

遙憐小兒女 遙かに憐れむ 小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶ふを解せざるを

香霧雲鬢湿 香霧に雲鬢 湿ひ

清輝玉臂寒 清輝に玉臂 寒からん

何時倚虚幌 何れの時か虚幌に倚り

双照淚痕乾 双び照らされて淚痕 乾かん

杜甫「月夜」は、賊に捕らえられて長安にいるテキストの主体が、秋の夜に月を眺め、乱を避けて鄜州にいる妻子を思い、再会はいつのことかと嘆くものであるが、注目したいのは第三句目と第四句目である。この二句について、指導書では、「①妻は夫のことを思う、②子は父のことを思うことができない、③作者は夫として妻を思い、父として子を思い、悲しみを分かつべき子がそばにいるのに子が幼いためにそれができない妻の悲しみを悲しく思う、という複雑な構造になる。」と解説している。そこで幼い子どもたちの様子について、手元にある参考書を見ると、その解釈は以下のようになっている。

○子どもが眠っていると解釈するもの

森野繁夫『漢文の教材研究漢詩篇（一）』（溪水社・88年9月）

賊に捕えられて長安にいる作者が、秋の夜、月をながめながら、遠く離れて暮らしている妻子を思いやり、いつになったら再会できることであろうと嘆きつづける。

子供は、あまりに幼いので、まだ、長安の賊中にいる父親の身の上を心配することを知らない。そのことを思えば、ほんとうにいじらしくてたまらない。これは、おのれの境遇を自覚する事を知らない幼い者に代って、杜甫がそれを意識してやり、そこにたまらない愛情を感じたのである。此の句は、無邪気に、もの思いにふける母親のそばでスヤスヤと眠っている子供たち（傍線は稿者による。以下同じ。）のことを「遙かに憐れむ」というのが直接の意味であるが、杜甫の心は、それとともに、何もわからない幼い子供たちのそばで、苦勞のためにやつれながら、自分のことを心配してくれている妻のことを、思っているはずである。

石川忠久編『漢詩鑑賞事典』（講談社学術文庫・09年3月）

おりからの満月を見て、北方の疎開先にいる妻子のことを思い、うたったもの。

妻のかたわらには、幼い子どもがスヤスヤ眠っている。父のいない悲しみなど知らぬ子どもだけに、かえって不憫だ、と子を思いやることは、つまり、その幼い子をかかえて一人いる妻を思うことなのだ。

○子どもがはしゃいでいると解釈するもの

吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第三冊（岩波書店・14年12月）

思いやる妻のイメージはしばらく後退し、遙かに憐れみいとおしまれるのは、おのれのある長安を思念する能力を母のように未だもたず、物思う母のそばで、同じく月光に浴しつつ、無心にはねまわっているであろう小き兒女。（中略）彼らは月下の母の物おにもいに同調することができず、ただ無邪気に、母のそばにいる。

直接にはそれを〔憐〕れむのであるが、彼らをそばにした妻をこそ〔憐〕れむのであること、いうまでもない。彼らは母の〔独〕を強めこそすれ、それを緩和しない。

○その他

松浦友久編『校注唐詩鑑賞辞典』（大修館書店・87年11月）

領聯の流水対は、子どもへの思慕であると同時に、無心にあそびたわむれる（あるいは、すやすやと眠る）子どもたちのそばで、ただ一人月を見つめて自分を思う妻へのいとおしみにほかならない。

鎌田正・田部井文雄監修『研究資料漢文学4』詩Ⅱ（明治書院・94年1月）

第一・二句は、吉川幸次郎が「今夜なる長安の月」とはいい出さずして、『今夜なる鄭州の月』と歌い出したところは、やはり、杜甫的であると感ずる」（『杜甫ノート』）と指摘するごとく、一見何げない表現のようでありながら、極めて斬新な発想といえよう。そこには、生命の不安の中で、ひたすら妻を思慕する杜甫の切迫した心理が投影しているのかも知れない。しかし、その思いは妻の身の上ばかりでなく、父の安否を気遣うことさえもできないほどあどけない幼子にも及ぶ。それは、明日をも知れぬ身の上の父を案ずることもできないほどあどけないがゆえに、一層のいとおしみを誘うのである。

こうした屈折した表現の中に、杜甫の、妻子に寄せる切ないまでの深い愛情がにじみ出ていよう。

漢詩・漢文教材研究会編『漢詩・漢文解釈講座漢詩Ⅲ』（昌平社・95

年5月）

領聯では、父親の安否を気づかうことすらできない幼児たちへのいとおしみが示されるが、そうした無邪気な子どもたちの様子を思いやることは、その側で一人愁いに沈んでいるであろう妻への思慕の情を、一層かき立てずにはおかなかつた。

このように子どもたちが眠っているとすると、子どもたちははしゃいでいるとするものと解釈が異なっているが、稿者は以下の大國眞希・安藤公美両氏、鳥越けい子氏の論をふまえて解釈したいと考えている。

大國眞希・安藤公美「〈音〉に注目した文学教育と環境教育の横断的研究序論」（『川口短期大学紀要』26号・12年12月）

〈風景〉は、眼前の光景それ自体ではなく、それまでの実体験や、読書体験を踏まえつつ、主体内部に起こる出来事としての〈風景〉である。したがって、その〈風景〉は、光景を前にした主体の経験（経験を積んだ身体）に左右される像といえる。

鳥越けい子「音の文化」を発掘する「音の風景」の思想―「ねりまを聴く、しずけさ」―選を中心にして（『日本の音の文化』第一書房・94年6月）

「サウンドスケープ」の考え方は、今まさに鳴り響いている現実のあたまたまの音の中で、人々がどの部分を聴いているのか、またそれらにどのような意味や価値を見いだしているのかを問題にするだけではない。そのとき物理的に存在しない音でも、人々が何ら

かの形で意識し、聴いている音であれば、それらの音をその場の「音の風景」の重要な構成要素として取り上げるのである。(中略)「サウンドスケープ＝音の風景」が問題とする「音の世界」は、物理的に確認できる音だけではなく、そうした方法論によっては決して把握することのできない「記憶の音」や「イメージの音」にまで及ぶことになる。

つまり大國・安藤両氏が言うように、〈風景〉が「光景を前にした主体の経験(経験を積んだ身体)に左右され」、鳥越氏が言うように、「物理的に存在しない音でも、人々が何らかの形で意識し、聴いている音であれば、それらの音をその場の『音の風景』の重要な構成要素として取り上げ」、それが「記憶の音」や「イメージの音」にまで及ぶ」のであれば、子どもたちははしゃいでおり、その子どもたちの声がテキストの主体にも聞こえていた、と解釈できるのではないかと、ということである。

李白「静夜思」〔唐詩選〕

牀前看月光 牀前 月光を見る

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと

挙頭望山月 頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

李白「静夜思」は、静かな秋の夜、寝台の前の白い月光を見、頭を上げて山月を見れば、故郷がしのばれるというものである。そこ

で第四句について、これも手元にある参考書を見ると、その解釈は以下のようになっている。

森野繁夫『漢文の教材研究漢詩篇(一)』(溪水社・88年9月)

静かな秋の夜、寝台の前の白い月光を見、頭を上げて山月を見れば、故郷がしのばれてならない。

山月を見ているうちに、故郷の山の上に出ていた月のこと、今夜も山に出ているであろう月のことを思い、さらに故郷のなつかしい人々のことを思いおこしているうちに、頭は次第にたれてきたのであろう。

川合康三『漢詩のレッスン』(岩波ジュニア新書・14年11月)

夜のしじま、周囲が寝静まって物音一つしない静寂のなかで、ひとり物思いに耽っている人の姿が浮かび上がってきます。

月の光をたどるように見上げると、夜空には月が冴え冴えと輝いています。その月は自分のもとを照らしているのと同じように故郷を、故郷にのこしてきた家族を照らしていることだろう。そう思っ**て**じつとつむいて故郷の人々のことを懐かしく思い起します。

漢詩・漢文教材研究会編『漢詩・漢文解釈講座漢詩Ⅱ』(昌平社・95年4月)

寝台のあたりに差し込む月明かり、周囲を冴え冴えとさせるその光をじつと見つめる。あたかも霜が降ったような白さである。

そう、この月明かりを、旅路にある自分が見ているように、故郷の家の者も見ているであろう。思いがふと胸をよぎり、顔を振り

仰ぎ山の端に出ている月を見る。間接的に地面に反映した光を見ていた時とは異なり、直接的に月光を望み見ると輝きはいつそう増し、望郷の念はひとしお募る。その思いに堪えかねて、すなわち光を見続ける行為に堪えかねて、顔を伏せる。しかし、そうしても、故郷への思いを断ち切れない。

松浦友久編『校注唐詩鑑賞辞典』（大修館書店・87年11月）

ベッドの前にそそぐ月の光をみて、まるで地上におりた霜ではないかと思った。頭をあげて山の端の月を仰ぎ、また頭をたれて故郷を思う。

鎌田正・田部井文雄監修『研究資料漢文学4』詩Ⅱ（明治書院・94年1月）

静かな月夜、牀前を照らす月光によって、込み上げてくる望郷の念を、新楽府の題で詠じたものである。前半二句では巧みな比喻を用いて、月光に見入り、幻想の世界へ引き込まれる詩人自身を、後半二句では対句を用いて、故郷で見た月を回顧し、心のうち湧き起こる望郷の念を詠じている。

石川忠久編『漢詩鑑賞事典』（講談社学術文庫・09年3月）

静かな月光にさそわれて、おのずと湧き出る望郷の念をしみじみとうたったものである。

この詩は、寝台の前の月光を霜かと疑い、月の光を認め、それが山の端にかかるのを見、見ているうちに故郷がしのばれてうなだれる、というように、動きが自然に流れている。

このように故郷の何を具体的に思うのかについて、言及している

ものとしていないものに分かれるが、指導書では、「この詩の主題は『思故郷』であるが、四句中三句は『月』のことで、ようやく『思』がでてきても、そこで詩は終結し、その内容については何も表現されない。すなわち、何を、どのように思うかは、読者の想像にゆだねられる。」と、解説している。したがってこの詩においても、テキストの主体に故郷の人々の声が聞こえていた、と読んでもよいのではないだろうか。

以上が、C【声の記憶を考えさせる授業】の提案である。この二首の解釈は、稿者の偏った解釈であるかも知れないが、人間の想像や記憶には、視覚的要素に限らず、聴覚的要素も含まれていることを学習者に気づかせることができれば、テキストの主体の「心」により迫ることができる、と考えている。

そしてこのように聴覚に着目させることは、鷺田清一氏が「わたしたちのふだんの生活体験において、〈いま〉〈ここ〉ということがほんとうになりたっているのかということだ。少なくとも、わたしの〈いま〉〈ここ〉から放射状に開けた遠近法的な風景というものは、都市からうんと離れた僻地や無人地帯にでも行かなければ出会えないようにおもえる。いやそこへ行ってさえ、知覚風景は単純な遠近法によって一様に構成されることはない。（中略）視覚の風景も、聴覚の風景も、一様に連なったものではないし、そこには幾重もの異なった情報のコンテキストが差し込まれ、錯綜している。」と述べるように、^⑤〈いま〉〈ここ〉ということが成り立ちにくく、視覚の風景と聴覚の風景が錯綜している私たちにとって大切なことなのではないか、と思われる。

三 小結と今後の課題

以上複数の漢詩（唐詩）教材を用いた授業づくりについての提案を行った。勤務校の関係で、稿者は大学院に戻っていた三年間を含め、ここ十年以上漢詩（唐詩）の授業を行う機会を持っていないため、本提案は、具体性に欠け、まとまりのないものになってしまった。今後、実際の授業を行い、いつかその報告をする機会を持ちたい、と思っている。

また稿者の興味に関連して言えば、高等学校「国語」教科書に採録されている漢詩には、様々な音が詠まれている。したがってそれらを用いたサウンドスケープに基づく漢詩の授業は、いろいろと考えられるであろうし、学会当日、竹村信治先生にご教示いただいたように、「音が無い」ということもサウンドスケープの一つだ、と考えれば、その可能性はより大きく拡がると思う。

最後に、稿者は漢詩（唐詩）教材は固定化されているものの、複数の教材の組み合わせによって、私たちの問題として考えられることはまだまだ多くあるはずだ、と考えている。そして複数の教材を組み合わせる際、その教材をどこから持ってくるか、ということが問題になるが、今回取りあげた教材は、すべて「国語総合」の教科書に採録されているものである。つまり無理をして教科書以外から組み合わせる教材を持つてこなくとも、「国語総合」の教科書の中でも十分に、様々な組み合わせを考えることができるのではないだろうか。そのため私たち国語教員は、今後も柔軟な発想を持って教材

研究を行うことが必要である、と思っている。

〈付記〉

今回の提案を行うことで、何年かぶりに漢詩（唐詩）の授業についてじっくりと考えることができ、それは本当に充実した時間であった。またこれからの自分の方向性も見えてきたように思う。このような機会を設けていただいた皆さまに、ここに記して感謝申し上げたい。

注

- ① 田中宏幸「古典との対話を通じて自己を問う直す授業実践の構築」『国語教育研究』第51号・10年3月
- ② 安藤信広『漢詩入門』（東京美術・89年3月）
- ③ 拙稿「国語総合」採録の唐詩における自然の情景描写について——音に着目して——『国語教育研究』第55号・14年3月
- ④ 川合康三『漢詩のレッスン』（岩波ジュニア新書・14年11月）
- ⑤ 鷺田清一「都市の感情」『死なないでいる理由』単行本・小学館・02年5月
- ⑥ 拙稿「高等学校「国語」教科書採録の漢詩の音について」『水月』創刊号・15年4月）参照。

（福岡県立八幡高等学校）